

auburn：シェイクスピアの色彩語
— 借用語にみる形態規則の干渉 —

三輪 伸春

***auburn*—A color-word in Shakespeare:**

Morphological interference on borrowed words

MIWA, Nobuharu

Abstract

E. Sapir writes, “The study of how a language reacts to the presence of foreign words — rejecting them, translating [translate, “ To change in form, appearance, or substance, to transmute”, *OED*², translate 4.III.4] them, or freely accepting them — may throw much valuable light on its innate formal tendencies.” (Sapir, *Language*, 1921, p. 210)

However, as far as I know, no linguists have ever paid any attention to Sapir’s view. The present paper is a philological attempt to clarify how the innate formal system of English interferes when foreign words are introduced into the language, taking the case of *auburn* in Shakespeare, and to insist that Sapir’s view should be taken into consideration in English lexicology

Keywords : auburn, Sapir, Shakespeare, morphology, lexicology

要旨

サピアは以下のように言う。“The study of how a language reacts to the presence of foreign words — rejecting them, translating [translate, “ To change in form, appearance, or substance, to transmute”, *OED*², translate 4.III.4] them, or freely accepting them — may throw much valuable light on its innate formal tendencies. (E. Sapir, *Language*, 1921, p. 210)” (ある言語が外来語に直面した時にどのような反応を示すのか—拒絶するのか (rejecting them), 手を加えた上で受け入れるのか (translating them), それとも無条件に受け入れるのか (freely accepting them) —についての研究は, その言語に内在する形態のパターン (=体系) の傾向に多くの貴重な光明を投ずる場合がある。)

しかし, 筆者の知る限りでは, 先行研究で, 外来語が借用された際に, 受容する側の言語の形態の体系がどのように干渉する (to translate) かを考慮した研究はない。本稿は, 徹底した文献考証により, シェイクスピアの英語に借用されている *auburn* が受けた形態変化から英語の形態の体系の特徴の一端を明らかにし, 英語における借用語研究にサピアの見解が不可欠であることを証明する。

キーワード : auburn, サピア, シェイクスピア, 形態論, 語彙論

はじめに

シェイクスピアの英語は発音、文法（形態、シンタックス）、語彙・意味のどの領域も想像以上に問題が多い。

シェイクスピアの時代は英語という言語がゲルマン語時代から受け継いだ古い言語から近代風の新しい言語に脱皮しようとした時代であったので古い時代の特徴が残る半面、新しい英語の特徴も芽生えつつあり、新旧2種類の英語が併存していた。新旧2種類の英語は、保守的な上流階級・知識階級の、どちらかという書き言葉重視の英語と、進歩的な、どちらかという口語の、下層階級の英語と置き換えてもいい。古くからのゲルマン語の特質をよく維持している古期英語の時代から古い英語が徐々に衰退する一方、近代思想を表現できる新しい英語が徐々に台頭してきて保守的な英語にとって代わるまさにその接点の時代にシェイクスピアは作家活動をした。右手の古い英語と左手の新しい英語を变幻自在に、自由自在にあやつって詩、劇作品を書いた。シェイクスピアの発音は、たとえば、ドブソン (E. J. Dobson)¹ のように、当時の初期文学者の書いた資料を証拠として重視すれば、保守的な古い発音だったという結論になり、ケカリッツ (H. Kökeritz)² のように、劇作品に用いられた口語英語を証拠として重視すれば、かなり進歩的な発音だったという結論になる。しかし、事實は、シェイクスピアは古い英語と新しい英語の双方を、そのどちらかに偏るのではなく、必要に応じて使い分けた。結果的には、英語が古い英語から新しい英語に脱皮するのに大きな影響を与えたといえるだろう。

シェイクスピア個人の意思で英語という言語が動いてゆく方向を自分の意のままに操ったというわけではない。英語、あるいはアングロ・サクソン民族が全体として流れてゆく新しい方向をシェイクスピアは敏感に感じ取ってそれを自分の作品に反映させた。そのような視点で考えると、発音も、文法も、語彙・意味も、古期英語、中期英語と比べてシェイクスピアの英語は現代英語に近いのでわかりやすいという見方は安易に過ぎるであろう。シェイクスピアの英語はベーオウルフの英語やチョーサーの英語のように単純ではない。誤解を恐れずにわかりやすくいえば、古期英語や中期英語の発音は、発音とスペリングがそれなりに一定していて、「大母音推移」のまっただ中であって、発音とスペリングが錯綜していて混乱状態にあったシェイクスピアほど複雑ではない。古期英語や中期英語の場合、現代までに残された文献の数・量が限られている上に、英語の方言、あるいはそれぞれの書き手の英語が写本により多様性はあるものの比較的均質であるのに対し、シェイクスピアの英語は登場人物が多種多様でありそれだけに用いられた英語も、上流階級の英語、下層階級の英語、方言と多種多様であり均質ではない。しかも、シェイクスピア自身の英語が初期、中期、後期へと作品を追うごとに変化している。新しい英語を実験的に用いているように思われる場合もある。あるいは、古い英語と次に来たるべき新しい英語を意図的に使い分けている場合もある。

1 E. J. Dobson, *English pronunciation 1500-1700*, 2 vols. 1957, '68².

2 H. Kökeritz, *Shakespeare's pronunciation*, 1953.

§ 1. 伝統文法の意味変化・語彙史研究

伝統文法が主流だった頃の、ブラッドリ (H. Bradley), イェスペルセン (O. Jespersen), L. P. スミス (L. P. Smith) の著書は意味変化, 語彙史の専門書ではないが, 語彙史と意味変化に多くのページを割き, 示唆にも富んだ著作であった。たとえば, OED の編者のひとりであったブラッドリは, *The making of English* (1904, 1968²) で次のように書いている。

(1) この動詞【carry】は物を地面から上げて, 場所を移動させることを意味するものとも一般的な語となった。

(ブラッドリ『英語発達小史』寺澤芳雄訳, p.191, 成美堂版, p.149, 下線引用者。
筆者補足は【 】で示す)

ものを運ぶということは, 動作の対象となる物体を, まず上に持ち上げて, 次に目的とする場所へ水平に横方向移動することである。そこで, (1) の下線部にある「地面から上げて【上への垂直方向(↑)】」と「場所を移動させる」という carry のもつ 2 種類の意味特徴に注目して, シェイクスピアが用いた 145 例の carry をすべて拾い上げて, この 2 種類の意味特徴に従って分類すると, シェイクスピアの carry には確かにはっきりと認識できる用法の違いがあることがわかる³。

また, イェスペルセンの *Growth and structure of the English language* (1905, 1948⁹) にも示唆に富む記述が多くある。たとえば, イェスペルセンは, シェイクスピアが使用したことによって英語に浸透した語彙と, シェイクスピアと同時代の, いわゆる難解語辞書のひとつであるコケラム (H. Cockeram, *The English dictionarie: or, an interpreter of hard English words*, 1626) との語彙の比較に言及している。そして, 「コケラムが難解語として採録している語彙のほとんどが今日ではごく日常的な語彙になっている」ことが意外な事実として述べられている。普通, 英語史の研究者は英語の発音, 形態, シンタックスと意味の歴史だけを研究して辞書史には関心がない。一方, 英語辞書史の研究者は, 英語史一般にはあまり関心がなく, 辞書史だけを研究する。したがって, 筆者の知る限り, シェイクスピアが使用している語彙と, 難解語辞書として知られているコケラムとを比較すること自体, イェスペルセン以外に, 過去に例がない。そして, イェスペルセンの示唆に従った語彙の比較研究は, コケラムが難解語としてその辞書に掲載している語が実は難解語ではないという興味深い結論が見えてくる。イェスペルセンの着眼点の卓抜さを示す例である⁴。

また, スミス (L. P. Smith, *The English language*, 1912) は, イギリスの思想史と英語の語彙史との間に密接な相関関係があることを実証した。特に, “Chapter 9 Language and Thought” では, F. ベーコン (F. Bacon, 1561-1626) の提唱した近代科学思想には, 従来になかった科学思

3 三輪「carryの意味, 用法」『シェイクスピアの文法と語彙』, 松柏社, 2005, 第11章。

4 三輪「コードリ (R. Cawdrey, *A table alphabeticall*, 1604) 再考」, 「近代英語辞書におけるギリシャ借用語」, 『英語の辞書史と語彙史』松柏社, 2014, 第7章, 第8章, pp.89f. イェスペルセンが取り上げた語は次のようなものである: abandon, abhorre, abrupt, absurd, action, activitie, actresse. actresse はコケラムでは ‘a woman doer’ として掲載されている。まだ, 「女優」というものがなかったからである。

想を表現するために、ベーコンがまったく新しい語彙を造語し、あるいは旧来からある語彙に新しい意味を付加したことをわかりやすく実証した。「新しい概念を表現するためには新しい語彙、もしくは旧来からある語彙に新しい概念を付け加える必要が生じる。」言葉をかえていえば、「新しい語彙が英語史上に初めて用いられた、もしくは旧来からある語彙に新しい意味が新たに加えられた場合には、新しい概念が英語にもたらされた証拠になる」という主張である。ベーコンの *The advancement of learning* (1605) を初出とする語と、旧来からある語に新しく付加された意味を調べると、ベーコンが近代科学思想にどのように貢献したかが具体的にわかる⁵。新しい時代の思考方法と語彙・意味の変化とが相関関係にあることの証左である。

ブラッドリ、イエスベルセン、L.P. スミスの「語彙史研究の方法」は、現代の理論重視の、厳密な意味論、語彙論の方法とは違うが、英語の語彙、意味の研究から、広く人文学的思考方法を教えるという性格を持ったものである。

ただし、これら3人の方法は、意味・語彙の領域と言語の外的側面との関係だけが論じられていて、発音と文法【形態とシンタックス】の干渉が考慮されていない。外的要素が言語の内部に入り込む時には、発音と文法（特に形態）が干渉することに気づいていない。

§ 2. 語彙史・意味変化と発音・形態との相関関係

意味論関係の先行研究で、新しい語を造語するに、その言語の音声の規則あるいは文法（特に形態）の規則がどのように干渉するかを、具体的に意識して論じた先行研究は、筆者の知る限り、ないようである。本稿では、外的要素が言語の内的領域に組み入れられる際に、言語の内的要素である音声と文法がどのように干渉するかを考察する。

意味変化・語彙変化が言語の外的要素に大きな影響を受けるといっても、意味論 (semantics)・語彙論 (lexicology) だけが言語外的要因と関わるわけではない。音韻論 (phonology)、形態論 (morphology) も程度の差があり、また関与の仕方は違うが言語外的要因と密接に関わるという事実は意外に認識されていない。

実は、発音は言語の外面的要因に大きく依存する。発音は、実際に発音された言語外的な物理的な音声を対象として記述し分析しなければならない。また、同じく言語外的要因である発音器官を考慮に入れなければ音声学・音韻論は成立しない。さらに、ネイティブスピーカーの意識の裏に潜む「内的な音韻の体系」を調査しなければ真の音韻論とはいえない。また、音韻体系は、均整の取れた体系を理想として変化しようとするのに反し、口、舌、歯、口蓋などの器官は、食べ物の咀嚼、消化には好都合にできていても発音するには均整のとれた構造とはいえない。発音に関わる言語の外的要素である口腔器官の不均衡な構造と理論的な音韻体系は整合してない⁶。発音は不均整な口腔の生理的構造に依存し、その影響を受けて変化する。均整のとれた理想の音韻体系と言語外的な、不均整な口腔機関の構造との乖離が音声変化を生じる最大の要因になっている。発音を考察する際にも言語内的な音韻体系と言語の外的側面である

5 三輪「F. ベーコンの近代科学語彙：思想と語彙」『英語の語彙史』南雲堂、1995、第6章、pp.76f. なお、O. パーフィールド『英語のなかの歴史』（渡部昇一・土家典生訳、中央公論社、1978）には、スミスの記述そのままの借用が少なからずみられる。

6 マルティネ『言語学要理』三宅徳嘉訳、岩波書店、pp.288f.

口腔器官の不均整な構造を考慮しなければならない。

形態にしても、発話に現れたさまざまな形態の裏に潜む心理的な「形態の体系」を明らかにしなければならない。形態は「類推」という言語外的な心理的作用により左右されることを考慮しなければならないからである。言語外的要素の影響で新しい語が形成されようとする時、その新しい形態が、従前から存在する形態と適合しなければならない。その言語にとってまったく新奇な形態は拒否され、類推作用を経て、従来からある形態の組織に組み入れられる。

音韻、形態、シンタックスも実は、言語の外的側面と密接に関係しているが、関与の質が違い、関与の仕方も違うためであろうか、言語外的要素と密接にかかわることは意外に認識されていない。

ブラッドリ、イエスベルセン、L.P. スミスも、意味と語彙の領域と言語の外的側面との関係だけを考察していて、言語の別の内的側面である「発音と文法（特に形態）」の果たす役割を考慮していない。少なくとも明言していない。

言語の内的側面と外的側面との関連で、サピアが見解を述べている。E. サピアは次のように書いている。

(2) 私は、どちらかといえば、音声学と文法【形態論】を相互に無関係な言語の分野であるとして分離させる現代の傾向は不幸である、と考えている。

(サピア『言語』岩波書店、p.319)

「音声学と文法が相互に無関係な分野であるとして分離」して考察するのではなく、「意味・語彙」を加えて、音声、文法（特に形態）と意味・語彙が相互に関連しあっているという観点から意味変化、語彙変化を考えてみる。

語彙・意味の変化は定式化の難しい分野である。音韻論や形態論と違って言語の内的な考察だけでなく、言語の外的事情も考慮しなければならない。言語の内的領域と外的領域の双方をどのように過不足なく考慮に入れるのかが大きな問題である。ブラッドリたちも興味ある方法論、視点を提示しているが、彼らは、語彙、意味と発音、文法とは相容れないものであるという前提で考えているようである。あるいは、語彙・意味の変化に、発音・形態を考慮に入れるという視点そのものに気づいていない。このような考え方は、19世紀の印欧比較言語学の伝統に基づくものである。本論は、従来の語彙史論、意味変化論には欠けていた方法論を求める試みである。語彙変化・意味変化にも発音と文法（形態とシンタックス）とが相互に関連しあい、連動している、という観点から語彙変化、意味変化を考えてみる⁷。

7 このことは、理論の精密化、定式化の進んだ現代の意味論とは違う。現代の意味論は研究対象をことのほか言語の内面に狭めている。

1. シェイクスピアにおける **auburn**

§1. シェイクスピアの語彙の問題点

シェイクスピアの作品中には問題のある色彩語が多数ある。そのひとつが **auburn**（現代英語「とび色（の）」）である。この **auburn** という語の形態変化とそれに伴う意味変化は英語史の言語内的考察だけでは説明できない。英文学、英語史の文献とそれ以外の文献を参照して、**auburn** の形態変化、意味変化を考え、ひいては英語史における語彙変化と意味変化の特性と研究方法を考える。**auburn** の場合も、意味変化と形態変化が相互に関連して変化している証拠をシェイクスピアに見いだすことができる。

シェイクスピアの **auburn** は版により **auburn**, **aborn**, **abram** として『コリオレーナス (*Coliolanus*)』(1607-8) と『ヴェローナの2紳士 (*Two Gentlemen of Verona*)』(1594) に各1回用いられている。その他に、フレッチャー (John Fletcher, 1579-1625) との共作とみなされている『ふたりのいとこの貴族 (*The Two Noble Kinsmen*)』(1613) に1回ある。

auburn の3例を Riverside 版から引用する。

(3) シェイクスピアに用いられた **auburn**

a. 3. *Citizen*. We have been call'd so of many, not that our heads are some brown, some black, some abram, some bold, but that our wits are so diversely color'd;...

(*Coliolanus*, II. iii. 18-20, 以下, 下線引用者, 以下同じ)

(市民3：おれたたちのことをそんなふうと呼んだのはまだたくさんいる。べつに頭の毛が茶色とか、黒とか、とび色とか、はげだとかいうわけじゃない。つまり、知恵の働きがいろいろにわかれているというんだ。)

b. Her hair is auburn, mine is perfect yellow;

(*Two Gentlemen of Verona*, IV. iv. 189)

(あの方の髪はとび色なのに、私のは完全な黄色)

c. (...) He's white-haired,

Not wanton white, but such a manly color

Next to an aborn;

(どうしようもない白色ではなく、とび色に一番近いあの男らしい色)

(*The Two Noble Kinsmen*, IV. ii. 123-5)

シェイクスピアに用いられた **auburn** の3例はいずれも「とび色」を意味する。ところが、シュミットの (A. Schmidt, *Shakespeare lexicon*, 1874, 1902³, rpt.1971, Dover) の説明には矛盾する点があるので、何が問題なのかを考える。

§ 2. シュミットの *Shakespeare lexicon* の矛盾点

まず、シュミットの *Shakespeare lexicon* の auburn には以下のように説明されている。

(4) **Auburn**, probably=whitish, flaxen: *heads some brown, some black, some a*. Col. II. 3, 21 (F1 Abram). *her hair is a., mine is perfect yellow*, Gentl. IV, 4, 194 (Florio, Ed. 1611: Alburno, a fish called a Blaie or Bleake. Also the white, the sappe or softest part of any timber subject to worm-eating. Also that whitish colour of women's hair which we call an Alburne or Aburne colour).

(Schmidt, *Shakespeare lexicon*, Auburn)

シュミットの記述を訳述し、この記述中にある矛盾点について考察する。(5) はシュミットの auburn の項の訳述。

(5) 【語義】 おそらく「白っぽい (whitish) ; 亜麻色の、明るい灰黄色の (flaxen)」:

【引用文 1】 *heads some brown, some, black, some auburn*. 『コリオレーナス』 II. 3, 21 (1613 年のファースト・フォリオ (First Folio) 版では Abram) ;

【引用文 2】 : *her hair is auburn, mine is perfect yellow*, 『ヴェローナの 2 紳士』 IV, 4, 194. (1611 年版のフロリオの『イタリア語—英語辞書』では「Alburno=Blaie あるいは Bleake と称される (白身の) 魚。また、木材の表皮に近く白みがかかった部位 (whitish), 樹液と【年を経て色素が沈着した赤い樹芯部と違って】もっとも柔らかい (softest) 部分で昆虫類が好んで食べる (subject to worm-eating) 部位。また, Alburne colour あるいは Aburne colour と呼ばれる, 婦人たちの髪の白っぽい色」)

(Schmidt, *Shakespeare lexicon*, Auburn)

シュミットの言及しているフロリオ (“Florio, Ed. 1611”) とは、フロリオの *QUEEN ANNA'S NEW WORLD OF WORDS* (1611) である。原文を引用する⁸。

(6) Alburno, a fish called a Blaie or Bleake.

Also the white⁹, the sappe or softest part of any timber subiect to worme-eating. Also that which colour of womens haire which we call an Alburne or A burne colour.

(John Florio, *QUEEN ANNA'S NEW WORLD OF WORDS*, 1611, スペリングは原文のまま)

フロリオは auburn のイタリア語形である alburno について述べている。女性の髪についてはイタリア語における、ラテン語以来の「白っぽい」を意味している。

シュミットの引用 (5) の語義説明は矛盾している。語義の「白っぽい (whitish)」と「亜麻

8 この辞書は *OED* における its の初例として有名なフロリオの『イタリア語—英語辞典』*A wolde of wordes* (1598) とは別の辞書である。

9 'the wood next to the bark of a tree, called the white, or alburnum', *OED*², 'worm-eating'.

色の、明るい灰黄褐色の (flaxen)」はごく近い色である。しかし、シュミットが引用している『コリオレーナス』と『ヴェローナの2紳士』における auburn の意味はいずれも「とび色 (暗い灰赤)」であって「白っぽい」ではない。なぜシュミットは例文の意味とは違う意味である「白っぽい」「亜麻色の、明るい灰黄褐色の」だけを定義としてあげながら、シェイクスピアからの引用文では「とび色」の例をあげているのか。しかも、シュミットは説明の後半では、わざわざフロリオの『イタリア語—英語辞書』を取り上げて、Alburne colour あるいは A burne colour 「白っぽい女性の髪」に言及して、auburn の意味を「白い」に限っているのはなぜか。いずれにしても、定義と引用された例文が矛盾している。

シュミットの矛盾から何がわかるのか。シェイクスピアの意図した auburn は一体どのような色だったのか。

§ 3. 『英語語源辞典』と OED² の説明

この疑問を解くために、まず、寺澤芳雄編『英語語源辞典』と OED² の記述を見る。

- (7) **auburn** adj. 《a1420 Lydgate》赤 [金] 褐色の、とび色の。 - n. 《1852》赤 [金] 褐色、とび色。◆ ME *auburn* (e) reddish brown, blond □ AF *auburn* = OF *auborne*, *alborne* □ ML *alburnus*, whitish ← L *albus* white: ⇒ ALB. ◇ 15-16C に *abron*, *abrune*, *abroun* の異形があったことから *brown* との連想が働き意味の変化を促したと考えられる。

(*auburn*, 『英語語源辞典』寺澤芳雄編, 研究社)

この説明は OED² にもとづいているので、全体的な問題は次に取り上げる OED² の項で述べるとして、この辞典に関する問題点を挙げる。第一に、語義で「赤 [金] 褐色の、とび色の。 - n. 《1852》赤 [金] 褐色、とび色」と、ME, AF, ML に用いられた意義の “blond, whitish, white” との色の違いに関する説明がない。第二に、「◇ 15-16C に *abron*, *abrune*, *abroun* の異形があったことから *brown* との連想が働き意味の変化を促したと考えられる。」という一文では、辞書としての紙幅の関係もあろうが、以下の【 】のような補足説明が望ましい。「◇ 15-16C に【音位転換による】*abron*, *abrune*, *abroun* という異形があったことから *brown* との連想が働き、【「white, blond」から「とび色」へという】意味の変化を促したと考えられる。」¹⁰

次に OED² の auburn の項。

- (8) **auburn**, a. a. Forms: 5-7 *aborne*, *-ourne*, 6 *alborne*, *auberne*, *aberne*, 6-7 *auborn* (e), *abourn*, *aburn* (e, 9 *auburne*, 8- *auburn*; also 6 *abron*, *abrun* (e, 7 *abroun*, *abrown*. [a. OF. *alborne*, *auborne*: — L. *alburnus* (= *subalbus*, Du Cange) nearly white, whitish. In 16-17th c. written *abron*, *abrune*, *abroun* (cf. APRON, *aperne*¹¹), which prob. originated, or at least encouraged, the idea that *auburn* was a kind of *brown* (an etymology actually adopted

10 「15-16C に (...) 【「white, blond」から「とび色」へという】意味の変化を促した」とあるが、「15世紀」というのは時期尚早であろう。15世紀にはまだ *bron*, *brun* という異形はない。

11 音位転換 (-or-, -ur- > -ro-, -ru-)。

by Richardson), and so helped to modify the signification of the word.]

orig. of a yellowish- or brownish-white colour;

now, of a golden-brown or ruddy-brown colour.

1430 LYDG. *Chron. Troy* ii. xv, Aborne heyr

crispyng for thickestesse(...) ~1859 GEO.ELIOT *A. Bede* (...) pale red hair to auburn.

b. absol. quasi-n.

1852 D. MOIR *Christm. Musings* v. Wks. II .254 thy tresses in the breeze Floating their auburn.

(*OED*², auburn)

上の *OED*² の説明文を解釈する。

(9) 【語形】15世紀の語形は *aborne*, *alborne* でリドゲイト (Lydgate) が初例 (1430)

16-17世紀以降は, **auborn(e)** 系と **aburn(e)** 系が現れて, 現代英語に続く。

【語源】*auburn* は古フランス語 *alborne*, *auborne* の借用であり中世ラテン語 (med.L.= medieval Latin) の *alburnus* ‘whitish’ に由来し, 古典ラテン語の *albus* 「白い」を語源とする。

一方, 16~17世紀にはしばしば *abrun*, *abro(u)n*, *abrown* というつづりが見られるので *brown* との類推で「白い」から「とび色 (暗い灰赤色)」という意味を表わすようになったと考えられる。これはリチャードソン (C. Richardson) の見解である。*Abro(u)n* から *auburn* へは *aperne* から *apron* への変化と同じく音位転換である。

【意味】もともとの意味は「黄色がかった白い」で現在は「金色がかった褐色の」。

形容詞の初例:

1430 LYDG. *Chron. Troy* ii. xv, Aborne heyr (...)

疑似名詞は唯一例。

1852 D. MOIR *Christm. Musings* v. Wks. II .254 thy tresses in the Floating their auburn.

以上の記述から, 現代英語での意味は「赤[金]褐色 (の) (名詞・形容詞)」である。形容詞「赤[金]褐色の, とび色の」の英語での初例は1430年のリドゲイト (Lydgate) であり, 名詞用法の初例は1852年の D. Moir で, 唯一例。アングロ・フランス語から *auburn* として借用され, 古期フランス語では *auborne*, *alborne*, 中世ラテン語は *alburnus* で意味は「白っぽい (whitish)」, 古典ラテン語の *albus* 「白い (white)」, そして同族語 (同じ語源の語) として *alb* がある。

意味については, もともとの意味は「黄色がかった白い」で現在は「金色がかった褐色の」という記述はあるが, その意味変化がいつ頃どのような事情で生じたかについては, *OED*²に

は説明がないが、実は、16～17世紀に、alburnusの音位転換形である abron, abrune, abroun という異形態があったことから brown との類推が働き、意味変化した。

§ 4. リチャードソンの auburn

*OED*² にはリチャードソンへの言及があるので該当箇所を引用する。

- (10) AU' BURN, *adj.* Written by Beam. and Fletch. and Hall, *Abron*. The first folio (p.36) Two Gentlemen of Verona, reads *Aburne*. In Coriolanus (fol. 12) *Abram* perhaps is for *Abron*. And the word probably is merely *A bron*, i.e. *brown*, the past part. of to *bren* or *brin*, to burn. See Brown, and Bronze. Brown, or approaching to brown.

(C. Richardson, *A new dictionary of the English language*, 1836-7, vol.1, AU' BURN)

リチャードソンは *aburne* というスペリングで Sir T. Elyot とシェイクスピアの *Two Gentlemen of Verona* から各 1 例, *auborn* というスペリングで Sidney から 1 例, *abron* というスペリングで *Two Noble Kinsmen* と Hall¹² から各 1 例, *auburn* という綴り字で Carew, Dryden, Cowper から各 1 例を引用している。16～17世紀の abron, abrune, abroun という語形が brown との類推を生じ, *auburn* に「褐色の」という意味をもたらした。少なくとも連想させたというのがリチャードソンの見解であり, それを *OED*² が認めている¹³。従って, 「白色系」から「褐色系, とび色」への意味変化は16～17世紀の頃である。具体的にいえば, シェイクスピアの時代である。さらに, リチャードソンは, 『『コリオレーナス』の Abram はおそらく *Abron* であり, a brown つまり brown であろう』としている。末尾近くの “And the word probably is merely *A brown*, i.e. *brown*” は, フロリオが *Alburne* を a burne colour と異分析を示唆しそれをリチャードソンが借用したのであろう。ということは, *alburne* の -l- は alms, almond と同様にすでに発音されなくなっていたと考えられる。brown は古期英語の動詞 *bren*, *brin* (= to burn) の過去, 過去分詞であろうとしている。確かに, 古期英語以来, *brin-*, *bren-*, と *burn-*, *bern-* などが常に, どの方言でも音韻交替と音位転換形が錯綜している。少なくとも, 『『コリオレーナス』の Abram はおそらく *abron* の異形態である。言語内的な, 音位転換に加えて, 言語外的な, エイブラハム (Abraham) の髪が黄褐色, とび色系であったことが原因であったと考えられる。それが1613年の *First Folio* から *Third Folio* で Abram になっている理由である。

§ 5. シェイクスピアの auburn のまとめ: 「白色 (の)」から「とび色 (の)」へ

『英語語源辞典』, *OED*², リチャードソンの辞書からわかることは以下のようにまとめることができる。

12 「ところが, *auburn* は15-16世紀ごろ【brown との形態上の類推で】*abron* とも綴られ, ホール主教 (Bishop Joseph Hall, 1574-1656) が1598年ごろに書いた風刺詩の *abron locks* 「エイブロン色の頭髪」という表現では, *abron* が今日の brown (褐色) と混同されている。後に, 綴りは元に戻ったが, その「色」は「褐色」のまま残った。」(『シブプリー英語語源辞典』*auburn*, p.61, 大修館書店, 2009。しかし, 実際は, 「15世紀」には *abron* という語形はまだない。

13 なお, リチャードソンは『ふたりの親戚の貴族』を, シェイクスピアではなく, ボーモントとフレッチャーの共作であるとしている。

auburn の語源はラテン語の *albus* ‘white’ であるから、もともとの意味は「白い」である¹⁴。中期英語期に「白い」という意味で借用された。シュミットが「白っぽい (whitish)」と記しているのはそのためである。auburn の語源は古典ラテン語の *albus* ‘white’ である。しかし、シェイクスピアの auburn はシュミットが記している「白い、白っぽい」という意味ではない。シュミットは語源を説明しているだけであり、シェイクスピアの実際の用法・意味については説明していない。『英語語源辞典』も、「白い」という語源を説明しているがシェイクスピアが実際に用いている『コリオレーナス』、『ヴェローナの2紳士』の「とび色」については説明していない。また、「赤[金]褐色 (の)、とび色 (の)」という現代英語の意味が語源であるラテン語の *albus* “white” からどのように生じたのかについての説明がない。シュミット「白っぽい」という語源の意味だけを記述し、引用例は「とび色」をあらわす『コリオレーナス』、『ヴェローナの2紳士』の2例を挙げているだけである。

中期英語の auburn が「白い」を表わすことは *Prompt Parvulorum* (c.1440, rep.1865, Camden, p.17) の ‘AWBURNE coloure. *Citrinus* 【シトロン色 = 淡黄色】」にみられる。

中期英語の auburn が「白い」という意味から1600年頃までには、「とび色」へと変化した過程は以下のように説明できる。16世紀末から17世紀初めにかけて古い auburn (e) という語形が音位転換という形態変化(言語内的現象)により, *abron*, *abrune*, *abroun* (au+burn> abrun) となり, 語源俗解 (folk etymology), あるいは異分析 (metanalysis. いずれも言語内的現象) により a+brown と解釈された。そして、「褐色系統の色」を好む時代の流行(言語外的要因)に応じて brown という後半の要素から「とび色, 赤[金]褐色」という「褐色」系の新しい意味を獲得した。auburn から *abron*, *abrune*, *abroun* への音位転換による形態変化の過渡期の例は主教ホール (Bishop Hall) の ‘Curled head With abron locks was fairly furnished’ (*Satires in Six Books*, 1599年版, Bk. III. v. 8) にみられる (*OED*², auburn. W. W. Skeat, *A glossary of Tudor and Stuart words*, 1914では Hall, *Satires*, v.8.)。これらの形態変化は, 意味・語彙の変化にも言語的内的要因が深く関連することの証明となる。ただし, 「白色」系統から「とび色」系統の色へと意味は変化した形態は旧来の auburn がその後勢力を得て復活した¹⁵。

3. エリザベス朝に流行した「とび色 (auburn)」の髪

§ 1. 言語外的要因

auburn の語形変化, 意味変化には, 言語内的原因の他に, 言語外的要因の作用も大きく影響している。エリザベス朝に「とび色」の髪が流行したという事情も, auburn が「白色」から「と

14 Cf. *album* 「アルバム = 写真などを張り付けるためになにも書いてない空白紙をとじたもの」, *albian* 「white land」 = Great Britain. フランス方面から船で渡る際に同島を形成する石灰岩のために南部海岸の絶壁が白く見えるため」, *albino* 「白子, 白変種」, *albumen* 「卵の白身」。

15 この点では, 語源俗解 (folk etymology) にもとづき新しい「非人間的な」という意味が加えられた。しかし, 17世紀後に, 語形は古典ラテン語の正しい形に戻った (*abominable*) が, 借用後に加えられた新しい意味は保持したままの *abominable* とよく似た変化をたどった。語源俗解の例は外来語にはよくある (三輪「シェイクスピアにみる外来語定着の一類型」『英語の辞書史と語彙史』 pp.212f.

び色」への意味変化を促した有力な原因である¹⁶。エリザベス朝に「とび色」の髪、肌の色が流行したために、「とび色」を表す語が必要となった。そして、abron, abrune, abroun という語の -bro(u)n, -brune という要素が brown との連想で注目されて、音位転換などを経て auburn が創出された。バーンハートは古期フランス語の aubornaz 'dark blond' の影響もあるとみる。しかし、古期フランス語 aubornaz 'dark blond' の影響というよりも、イギリスで新しく「とび色」が流行し始めたと感じたイギリス人が、「意味あり、形を求めた」。その結果、フランス語 aubornaz を参考にして auburn を考えついたと考えるべきであろう。

現代英語に普通の「赤[金]褐色(の)、とび色(の)」という意味はシェイクスピア時代に「赤[金]褐色、とび色」の髪の毛が流行して急速に広まったこと表わしている。そのことは、例えば、ダニエル (Samuel Daniel, ?1563-1619) のソネット集『ディーリア (Delia)』の主人公ディーリアの髪が1592年版では golden であったのに1601年版では sable「黒」に変えられていることからわかる¹⁷。このことからルネッサンスの影響によりギリシャ、イタリア、フランスなどの地中海文化の流入とともにそれまでの白色系統の blonde 賛美から地中海沿岸地域に多い「黒みがあった (brunette)」髪の色や肌の色に好みが急速に変わったことが読みとれる。

シェイクスピアの『ソネット集』127冒頭の、

(11) In the old age black was not counted fair,

Or if it were it bore not beauty's name:

But now is black beauty's successive heir,

And beauty slandered with a bastard shame;

(むかしは色が黒いのは美しいとは考えられなかった、

考えられたとしても、美の名では呼ばれなかった。

しかし、近ごろでは黒の美が正当な後継ぎとなったり、

色白の美の方が恥ずかしい私生児だとそしられたりする。)

(『対訳シェイクスピア詩集』柴田稔彦訳, p.117, 岩波書店)

という一節は、このような blonde, fair (白色系) から brunette (とび色系) への色の流行の変化を裏付ける表現である。

シュミットに引用されている『ヴェローナの2紳士』におけるジュリア (Julia) のせりふの全文を引用する。

16 バーンハートは古期フランス語の aubornaz 'dark blond' の影響もあるとみる (*The Barnhart dictionary of etymology*, 1988, p.64)。純粋な金髪は清廉潔白な印象を与える上に、(現代)世界の人口の1.8%と人口比率も少なく、中世期には神聖視され近よりがたいと感じられてきたが、おそれ多く、絶対視される神よりもルネッサンス期に生じた「暖かい血の流れる人間性重視」の考え方が、とび色などが混じった髪を人間らしいとして好む流行を生んだ要因のひとつと考えられる。また、エリザベス1世が黄金色の赤い髪だったからともいわれている (C. Leech, *TGV, The Arden Shakespeare*, p.104, 1969)。エリザベス1世は blonde だけでなくいろいろなかつらを80種類もっていた (春山行夫『博物誌Ⅲ髪』1989, p.58, 平凡社)。実際、女王の複数の肖像画は色の違った髪に描かれている。

17 『シェイクスピア：ソネット集』川西進編注, 鶴見書店, p.153.

(12) (*Julia*.) Her hair is auburn, mine is perfect yellow:

If that be all the difference in his love,

I'll get me such a color'd periwig.

(ジュリア：あの方の髪はとび色なのに、私のは完全な黄色。それだけで彼の愛情にあんなに大きな相違ができてくるのだったら、わたしはとび色のかつらをかかってきましょう。)

(『ヴェローナの2紳士』IV. 4. 189-191)

従来は、blondeの髪や白い肌が美人の象徴とみなされていたが、好みが金髪からとび色(auburn)に移り、金髪や黄色よりもとび色が好まれたと考えれば、ジュリアの嘆きも理解できる。

結果として生じた、シェイクスピアの時代に見られるauburnの意味変化・語形変化の過程のあらましは以上のように説明できる。

中世の人々が神々しい、恐れ多いと信奉した「白色系の髪、肌の色」から、ルネサンスの影響もあり、いかにも生氣にあふれた人間の、血色のいい「褐色系の肌、髪の色」への好みが大きな流れとなって流行し始めるのは16世紀末の頃である。そういう時代の雰囲気を感じ取り、人々の好みの変化が、auburnの形態変化・意味変化に反映しているのを敏感に感じ取ったシェイクスピアは作品中の英語に反映させている。シェイクスピアの英語の、発音、文法、語彙、意味変化には当時の、絶えず変遷する英語の姿が映し出されている。

ルネサンスに始まる、神を第一原理とする世界観から人間中心の世界観へと推移するヨーロッパの精神史がシェイクスピアの文学と英語に込められている¹⁸。

§ 2. auburnの意味・形態の変遷¹⁹ : マッケイの説明

以上に述べてきたauburnの総括的な説明がマッケイ(Charles Mackay)の*A glossary of obscure words and phrases in the writings of Shakspeare and his contemporaries* (1887)に記述されている。

(13) **Auburn.** There is some doubt as to the meaning of the word "auburn," as applied to the hair by Shakspeare and the writers of his time. Shakspeare has "her hair is *auburn*, mine is perfect yellow," which Johnson defines to be of a "tan" colour, from the French *aubour*, the bark of a tree; a sense, however, in which the word is not used. *Aubour*, according to Bescherelle, is from the Latin *albus*, white (more commonly written *aubier*), which modern French and English dictionaries render by "tender and whitish wood," between the bark and the heart of a tree.

(Mackay, 1887, pp.12-3)

18 G. スタイナー「シェイクスピア生誕400年祭」(『言語と沈黙』, pp.264f.)

19 本節からp.36の「結論」の前までは財前直美「A study of color terms in English」2004を参考にした。

このことから、auburn は、「木の樹皮を表すフランス語 aubour に由来し、この aubour は、(古期フランス語 alborne, auborne, 更に中世ラテン語 alburnus, 近代のフランス語や英語の辞書で、木材の芯と樹皮の間にある『柔らかく白味があった辺材』と表されている)ラテン語 albus からの由来」であることが分かる。

マッケイによると、auburn という綴りの起源には、3つの説が考えられる。根拠に乏しく、また、auburn の au- をケルト語の or 「黄金色 (の)」であると安易に置き換えるなど全面的には信頼できないが参考のために、以下にその3つの起源説が書かれている部分を引用する²⁰。

- (14) Being an English word not derived from the German, the French, or the classical languages, its origin must be looked for in the Keltic, where we find *or*, gold or golden, and *burn*, a stream; whence in bardic and poetical phraseology, the fair hair of a Keltic maiden, flowing like a golden stream down her back. This derivation is only put forward as a suggestion which, whatever may be its etymological value, is more pleasing than those of Johnson and Todd, or of Mr. Wedgwood, who adopts that of Todd; or of Worcester's and other modern dictionaries, who trace the root of the second syllable from *byrnan*, to burn with fire, as if auburn hair were of a fiery red. This derivation, it will be remarked, leaves the first syllable *au* unaccounted for, which is supplied by that which traces it to the Keltic. Possibly, however, the word may be half Keltic, half Saxon, from *or* and *brown*, golden brown, which is the colour, and not white or flaxen, which is popularly associated with the epithet.

(Mackay, 1887, pp.13-4)

以下、この引用で述べられている auburn の3つの起源説を要約する。

(15) (a) ケルト語起源説

auburn の第一音節 au がケルト語 or (英語の gold または golden) に当たり、第二音節 burn がケルト語 burn (英語の a stream) に当たる。詩的な語法でのこの起源は、「金色の小川のようにケルト人少女の背中に流れている美しい髪」である。

(b) ケルト語 + OE 起源説

この説は、Johnson と Todd, Wedgwood, Worcester による近代辞書によって紹介されている。彼らによると、auburn が激しい赤色を表すかのように、炎を伴って燃えるという意味の OE byrnan から、第二音節 burn が発達した。第一音節 au は説明されていない。

(c) ケルト語 + サクソン語起源説

第一音節 au がケルト語 or からの由来で、第二音節 burn がサクソン語 brown からの由来。(英語の golden brown)

20 マッケイはケルト語を主な専門とする。

上記のことから、auburn の綴りの起源には、(a) 第一音節 au がケルト語 or に当たり、第二音節 burn がケルト語 burn に当たる「ケルト語起源説」(b) 第一音節 au がケルト語に由来し、第二音節 burn が OE byrnan からの発達であるとする「ケルト語 + OE 起源説」(c) 第一音節 au がケルト語 or からの由来で、第二音節 burn がサクソン語 brown からの由来であるとする「ケルト語 + サクソン語起源説」の3つの説がある。

4. auburn の問題点

シェイクスピアは、auburn を *Two Gentlemen of Verona* (TGV), *Coriolanus* (COR), *The Two Noble Kinsmen* (TNK) の中で1例ずつ使用している。ここで、TGV と COR の Quarto 版は存在していないので、これらの例は Folio 版から引用し、Folio 版に収められていない TNK の例は、*The Riverside Shakespeare* から引用して次に示す。(F1 = First Folio, F2= Second Folio, F3= Third Folio, F4= Fourth Folio)

(16) (TGV.4.4.189)

F1 : her haire is Aburne, mine is perfect Yellow

F2 : her haire is Aburne, mine is perfect Yellow

F3 : her hair is Aburne, mine is perfect Yellow

F4 : her hair is Aburne, mine is perfect Yellow

(COR.2.3.19)

F1 : our heads are some browne, some blacke, some Abram

F2 : our heads are some browne, some blacke, some Abram

F3 : our heads are some brown, some black, some Abram

F4 : our heads are some brown, some black, some auburn

COR.2.3.19 の F1, F2, F3の Abram が F4で auburn に書き換えられているのは、F4 (1685) が出版された頃までには、「とび色」を意味する Abram が特殊で違和感が感じられるようになった一方、後発の auburn が「とび色」を表すにはより適切な語として一般に定着したからであろう。*OED*² の *Abraham*, *Abram* の項にその様子がうかがわれる。

(17) † *Abraham*, *Abram*, *a. Obs.*

[Corruption of AUBURN, formerly often written *abern*, *abron*.]

1599 *Solim. & Pers.* (Hazlitt's *Dodsley* V. 363) Where is the eldest son of Priam, That Abraham-colour'd Trojan? Dead. 1607 Shakes. *Cor.* ii. iii. 21 Our heads are some browne, some blacke, some Abram, some bald [*fol. of 1685 alters to auburn*]. 1627 Peacham *Compl. Gent.* 155 (1661) I shall passe to the exposition of certain colours.—Abram-colour, i.e. brown. Auburne or Abborne, i.e. brown or brown-black.

(*OED*², *Abraham*, *Abram*, 下線引用者)

but such a manly color / Next to an aborn

(TNK.4.2.124-5, The Riverside Shakespeare)

つまり、TGV では F1 から F4 まで全て Aburne が使用されており、COR では F1 から F3 まで Abram、F4 では auburn²¹ が使用されており、TNK では aborn が使用されている。このような表記の違いを調べるために、OED の auburn で取り上げられている例を年代順に挙げ、綴りの変遷を次に示す。この中に、Folio 版の表記も加えることで比較しやすくした (Folio 版には TNK は取められていないので、TGV と COR の例だけを示している)。

(18) <15世紀>

1430年 LYDG. *Chron. Troy* II. xv,

Aborne heyr crising for thickness.

1481年 CAXTON *Myrr*. II. xvii 103

The rayes of the sonne make the heer of a man abourne or blounde.

<16世紀>

1533年 ELYOT *Cast. Helth* (1541) 2

Heare blacke or darke aburne.

1547年 BOORDE *Brev. Health* lvi. 25

Alborne heare and yelowe heare commethe of a gentyll nature.

1576年 T. NEWTON *Lemie's Touchst. Complex.* (1633) 58

Faire aburne or chasten colour.

1580年 BARET *Alv.* A715

Light auborne, subflauus, subrutilus.

1591年 PERCIVALL *Sp. Dict.*,

Rojo abrun headed, *Subrufus*.

1594年 SHAKESPEARE (TGV)

1599年 HALL *Sat.* III. v. 8

Whose curled head With abron locks was fairely furnished.

<17世紀>

1607-8年 SHAKESPEARE (COR)

1613年 SHAKESPEARE (TNK)

1623年 F1 : (TGV) her haire is Aburne, mine is perfect Yellow

(COR) our heads are fome browne, fome blacke, fome Abram

1632年 F2 : (TGV) her haire is Aburne, mine is perfect Yellow

21 COR では F1 から F3 までは Abram、F4 では auburn が使用されているのは、Abram が「褐色、とび色」を意味することは17世紀初頭の一時的な現象であったので、F4 では「とび色」を意味することが周知されるようになった auburn に変更されている。

- (COR) our heads are fome browne, fome blacke, fome Abram
a1649年 DRUMM. OF HAWTH. *as. I* Wks. 1711, 16
His hair was abourn, a colour between white and red.
1663年 F3 : (TGV) her hair is Aburne, mine is perfect Yellow
(COR) our heads are fome brown, fome black, fome Abram
1685年 F4 : (TGV) her hair is Aburne, mine is perfect Yellow
(COR) our heads are fome brown, fome black, fome auburn
a1697年 in Masson *Milton* (1859) I. 275
'He had light brown hair,' continues Aubrey, —putting the word 'abrown'
('auburn') in the margin by way of synonym for 'light brown'.

<19世紀>²²

- 1808年 SCOTT *Marm.* v. ix
And auburn of the darkest dye, His short curled beard and hair.
1852年 D. MOIR *Christm. Musings* v. Wks. II. 254
Thy tresses in the breeze Floating their auburn.
1859年 GEO. ELIOT *A. Bede* 61
The rays..lit up her pale red hair to auburn.

15世紀には aborne, abourne と綴られ、16世紀末には brown との連想をうかがわせる abrun, abron が現れ、17世紀初めには「とび色」を印象づける Abram が用いられるようになっている。続く aburne, abourn は auburn に至る直前の姿を思わせる。これらの引用文のほとんどが髪の色を表している。

以下、念のために、「音位転換」を『新英語学辞典』から引用する。

(19) METATHESIS (音位転換)

- (1) 互いに隣接する2音がその位置を転換することをいう。(…)
- (2) 音位転換は歴史的過程においても起こる。英語では主な例として次のようなものが見出される。起こる時期は一様ではなく、またどの場合も散発的なものである。(…) (a) /r/ と母音 [主に/i/] の間 : OE bridd > ME bird; OE þrida > ME third / OE hros > ME hors (> ModE horse) / OE gærs > ME gras (> ModE grass) / OE þurh > ME through (> ModE through) / OE worht > ME wrought (b) /p/ と /s/ の間 : OE wæps > ME wæsp (ModE wasp) ; ME clapsen > ModE clasp.

なお、音位転換は強音節において起こるのがふつうであるが、/r/ と母音の間
の音位転換は弱音節において起こることもある。英語では、ME patron > ModE pattern

22 OED には18世紀の例がないので、N. Bailey, *Dictionarium Britannicum* (1730) から引用する : 'AU'BURN, a dark, brown, or chesnut Colour.'

の例が見出される。(…) 弱音節における /r/ と母音の間の音位転換は、/rV/ > /Vr/ の形で起こるのがふつうであり、事実、今日の標準英語に見出されるものはすべてその型のものであるが、ModE 初期の正音学書では、/Vr/ > /rV/ の型のものも記録されている：southron (southern の /ə/ と /r/ の音位転換)。

(『新英語学辞典』大塚高信・中島文雄編, pp.709-10)

1591年の aburne > abrun と、1599年の aborne > abron の2つの音位転換は、(2) の (a) に当てはまる。しかし、この音位転換が起こった後も、音位転換する前の形も当然文献には残されている。1685年の F4の COR で auburn は用いられているので、口語ではそれ以前から使用され始め、やがてこの綴りが確立した。

上記の年表の中で、F1, F2, F3の COR で、Abram という形が使用されている。

Abram は Abraham のもとの名前で、Isaac の父でユダヤ人の始祖を指す。このことから、auburn とは形態も意味も無関係のように思える Abram が、COR で auburn の意味で用いられた背景にはどのような根拠があったのだろうかという問題が生じる。

各種文献では、Abram は次のように述べられている：

*OED*² :

(20) Abraham, Abram, a. *Obs.* [Corruption of AUBURN, formerly often written *abern*, abron.]

1599 *Solim. & Pers.* (Hazlitt's *Dodsley* v. 363) : Where is the eldest son of Priam, That Abraham-colour'd Trojan? Dead.

1607 SHAKS. *Cor.* II. iii. 21: Our heads are some browne, some blacke, some Abram, some bald [*fol. of 1685 alters to auburn*].

1627 PEACHAM *Compl.*

Gent. 155 (1661) I shall passe to the exposition of certain colours.—Abram-colour, i.e. brown. Auburne or Abborne, i.e. brown or brown-black.

(*OED*², Abraham)

ブロックバンクのアーデン版注釈 (P. Brockbank, *The Arden Shakespeare, Coriolanus*, 1976):

(21)

abram : a colloquial variant of 'auburn' (the reading of F4) originally denoting a light yellow, but its association with the form 'abrun' gradually yielded the modern meaning 'golden' brown. Here the context requires blondes.

(P. Brockbank, *The Arden Shakespeare, Coriolanus*, 1976, p.180)

abram は auburn の転訛した形であり、もともとは「薄い黄色」を表していたが、abrun の後

半の要素 brun と brown の類推で、「金色がかった茶色」という近代の意味が生まれた。OED²(特に、1627年の引用)とアーデン版のブロックバンク (Brockbank) の記述から Abram が「金色がかった茶色、とび色」を意味していることは間違いない。

結論

語彙と意味の変化は言語の外的世界の変化と密接に関連している。同時に、証明しにくい事柄なので、はなはだまわりくどい書き方になったが、言語外的事情で「とび色」を表す単語が必要になり、新しく造語するに際して、英語という言語の音声、形態の言語内の規則は常に守られているということが重要である。言語外的側面の要請に応えた語彙・意味の分野での変化であるが、発音、文法の規則に従って新しい語彙は形成される。結果として、外国語である古期フランス語の alborne, auborne を活用して、auburn という語が新たに造語された。その際、語彙・意味と英語の発音・文法との整合性が大きく関与して(干渉して)新しく造語された。

英語は、新しい語を形成する場合、常に英語という言語の持つ規則に従って新しい語形成をしている。外国語が借用される場合も、無条件に借用されるのではなく、英語という言語の発音・形態の規則に適合するように手直し(例、音位転換、類推)を受けた上で借用される。そういう作業を、英語を話す人々が無意識のうちに実践し、その積み重ねで英語は変化してゆく。一般民衆は無意識のうちに、英語という言語に潜在する「英語という言語の内的規則」に従って話し、新しい語を造語し、新しい意味を生み出す。言語学者の仕事は、すべての一般民衆が「無意識のうちに共有している言語の内的規則」を解明することである。

以上のような原理をサピアは次のように述べている。

- (22) The study of how a language reacts to the presence of foreign words — rejecting them, translating them, or freely accepting them — may throw much valuable light on its innate formal tendencies.

(ある言語が外来語に直面した時にどのような反応を示すのか—拒絶するのか、手を加えた上で受け入れる²³のか、それとも無条件に受け入れるのか—についての研究は、その言語に内在する形態のパタン (= 体系) の傾向に多くの貴重な光明を投ずる場合がある)

(Sapir, *Language*, p.210; 訳, 下線は引用者; cf. 『言語』岩波書店, p. 341)

この引用文にみられるように、新しく造語された語の形成のされ方を検討すると、その言語の内的構造がわかる事がある。

auburn の形成のされ方、変化の過程にみられる現象を点検するとその過程で生じた言語現象は英語という言語の内的規則と密接に関連していることがわかる。例: 音位転換の仕方、異分

23 'translate' は、この場合「手を加える、変更する」を意味することに注意が必要である。Cf. OED², translate, 4. III. 4.

析の仕方。auburn は決して、外来の発音、形態そのままの借用ではなく、英語の言語内の規則に適合するように手直し（干渉）を受けて初めて英語の単語として認められるのである。そして、auburn の「白系統」から「褐色系統、とび色」への意味変化は、当時のイギリス民衆の色に対する好み、流行の変化をみることができるのである。この現象は、言語の外的世界と内的世界の相関関係を表している。L.P. スミスの意味変化研究の方法といえる。

また、たとえば、シェイクスピアを初例とする単語は多いが、いずれもシェイクスピアが発明したというよりは、一般大衆が無意識のうちに用いている新しい語を、言語感覚に優れたシェイクスピアが、新しい時代に必要な語であることを敏感に感じ取って自らの作品中に用いた。そして、次には、逆に、一般民衆が、それをシェイクスピアに教えられる形で意識し広めてゆくのである。

参考文献

- Bailey, N. *Dictionarium Britannicum*, 1730, rpt. Olms, 1969.
- Barnhart, R. K. *The Barnhart dictionary of etymology*, 1988, Wilson.
- Bradley, H. *The making of English*, 1904, 1968², Macmillan, ブラッドリ『英語発達小史』寺澤芳雄訳、岩波書店。
- Brockbank, P. *Coriolanus*, The Arden Shakespeare, 1976, Methuen.
- Florio, J. *QUEEN ANNA'S NEW WORLD OF WORDS*, 1611, www.pbm.com/~lindahl/florio/
- Jespersen, O. *Growth and structure of the English language*, 1905, 1948⁹, Blackwell.
- Leech, B. *Two Gentlemen of Verona*, The Arden Shakespeare, 1969, Methuen.
- Mackay, C. *A glossary of obscure words and phrases in the writings of Shakespeare and his contemporaries*, 1887, Sampson Low, Marston, Searle, & Rovington.
- Murray, J. A. H. et al. (eds.) *Oxford English dictionary*², 1884-1928, 1933, 1989², Oxford.
- Prompt Parvulorum*, c.1440, rep.1865, Camden.
- Richardson, S. *A new dictionary of the English language*, 1836-7, W. Pickering.
- Sapir, E. *Language: An introduction to the study of speech*, 1921, rpt.1963, Harcourt Brace.
- Schmidt, A. *Shakespeare lexicon*, 1874, 1902³, rpt.1971, Dover.
- Skeat, W. W. *A glossary of Tudor and Stuart words*, 1914, rpt.1968, Olms.
- Smith, L. P. *The English language*, 1912, rpt.1966, Oxford.
- Zaizen, N. (財前直美) "A study of color terms in English," 2004, unpublished.
- スタイナー, G. 「シェイクスピア生誕400年祭」『言語と沈黙』2001, せりか書房, pp.264f.
- 大塚高信・中島文雄編『新英語学辞典』1982, 研究社。
- 寺澤芳雄編『英語語源辞典』1997, 研究社。
- 春山行夫『髪一おしゃれの文化史』「春山行夫の博物誌Ⅲ」1989, 平凡社。
- 三輪伸春『英語の語彙史』1995, 南雲堂。
- 三輪伸春『シェイクスピアの文法と語彙』2005, 松柏社。
- 三輪伸春『英語の辞書史と語彙史』2011, 松柏社。
- 『シェイクスピア：ソネット集』1971, 川西進編注, 鶴見書店。

『対訳シェイクスピア詩集』2004, 柴田稔彦訳, 岩波書店。

原稿受領日：平成26年10月1日；Received 1 October 2014

掲載受理日：平成26年11月11日；Accepted 11 November 2014